

第3回運動・スポーツガイドライン(仮称)策定に向けた作業部会資料

- **朝の時間を活用した取り組み:**
国立代々木競技場室内水泳場の早朝営業トライアル
- **「みる」スポーツから「する」スポーツへ:**
トリクルダウン効果について

独立行政法人日本スポーツ振興センター
情報・国際部
久保田 潤

Copyright (C) Department of Information & International Relations, JAPAN SPORT COUNCIL

朝の時間を活用した取り組み: 国立代々木競技場室内水泳場の早朝営業トライアル

実施の経緯

- 関係者からの早朝利用の要望
- 営業開始時間を午前10時から3時間前倒しして7時から営業することを、スポーツ庁、JSC内で検討
- 平成28年7月27日(水)からの実施が決定

目的

- 国のスポーツ施設が率先して国民の多様なライフスタイルに応えること
- 全国のスポーツ施設運営に資するモデルとなること
- リオ2016を前に国民のスポーツへの関心を高め、スポーツを実施する場を広く提供すること



7月25日(月)の公開イベントでは、鈴木大地スポーツ庁長官が来場

朝の時間を活用した取り組み： 国立代々木競技場室内水泳場の早朝営業トライアル

実施概要、利用状況

- 実施期間：平成28年7月27日～10月31日
→平成29年7月2日まで延長
- 延べ利用団体173団体のうち、7時から8時30分に利用した団体は154団体（87.2%）
- 利用年代は、「31歳から40歳」が最も多く、次いで「41歳から50歳」「18歳から30歳」
- 利用目的の多くが、「自己の記録や能力の向上」
- 満足度は、「満足」「やや満足」の割合が66%

Copyright (C) Department of Information & International Relations, JAPAN SPORT COUNCIL

「みる」スポーツから「する」スポーツへ： トリクルダウン効果について

- 学術研究では、トリクルダウン効果に否定的な見解が多い
- メジャーイベントやビックイベントの機会を活用し、「みる」スポーツから「する」スポーツにつなぐための施策や戦略が必要

ロンドン2012オリンピック・パラリンピック競技大会からの

身体活動レガシーの構築

Developing a physical activity legacy from the London 2012 Olympic and Paralympic Games: a policy-led systematic review (2012)

- これまでのオリンピックで身体活動が向上したというエビデンスはない。
- ロンドン2012に積極的に関与していないコミュニティには、レガシーの分野を問わずレガシー構築の取り組みが届いていない。
- スポーツよりも、大規模イベントが持つ祝祭効果を利用することによって、身体活動を促す機会を生み出せる可能性がある。

Copyright (C) Department of Information & International Relations, JAPAN SPORT COUNCIL

「みる」スポーツから「する」スポーツへ： トリクルダウン効果について

バンクーバーオリンピックはカナダのスポーツ参加を向上させていない

Vancouver Olympics did not increase sports participation in Canada (2014)

- 2010年バンクーバー冬季大会は、メディア露出の高さや運動施設の整備にもかかわらず、スポーツ参加促進につながらなかった。
- カナダの5歳から19歳の子供・若者による組織的なスポーツ活動に変化はなかった。効果は、身体活動の季節変動に関するもののみ。
- オリンピック前から実施されていた身体活動促進プログラムによる効果の可能性もある(オリンピックのトリクルダウン効果は「神話」)。

スポーツイベントの「トリクルダウン効果」：思い込みと機会の喪失

The elusive “trickle-down effect” of sport events: assumptions and missed opportunities (2015)

- (中規模) イベント開催がきっかけで身体活動やスポーツ参加が増加したという実証的なエビデンスは欠如している。
- 参加促進のための戦略が欠けている。誰が戦略を立案し実施するのかを見極めることが重要である。
- イベントを活用してスポーツ参加促進する方法を各ステークホルダーが見つけるべきである。

「みる」から「する」への行動変容を促す

- スポーツ未実施者でイベント観戦をしない人がイベントに参加するようになるための仕掛け
- スポーツ未実施者でイベント観戦をする人がスポーツをするようになるための仕掛け
- スポーツ実施者でイベント観戦をしない人がイベントに参加するようになるための仕掛け
- スポーツ実施者でイベント観戦をする人がさらにスポーツに参加(定着化)するようになるための仕掛け

- イベント実施前・実施中・実施後の長期的な仕掛け
- メディアやインフルエンサーの活用

【否定的見解、提案】

スポーツイベントの「トリクルダウン効果」：思い込みと機会の喪失（2015年）

スポーツイベントが身体活動やスポーツ参加を引き起こすとする経験的エビデンスは十分ではない。本研究は、これまで開催した二つの中規模のスポーツイベントを比較し、地域のスポーツ団体や組織委員会がスポーツイベントを活用し、スポーツ参加を引き起こすことができたか、その程度について検討した。その結果、スポーツ参加を引き起こすための戦略は見られず、方策についてはわずかに見られた（メディアの露出、祝典、スポーツ指導等）。 主な制約は、戦略や方策を実行する責任を誰が有すべきか明確にしていないことによるものである。 本研究の知見は、イベント主催者、スポーツ団体、地域組織委員会等の様々な関係者に対して、スポーツイベントを活用し、全体的なマーケティング活動を行うことでスポーツ参加を引き起こす方法を示す。

（参照） The elusive “trickle-down effect” of sport events: assumptions and missed opportunities

Marijke Taks, Laurence Chalip & B. Christine Green.

Managing Sport and Leisure Volume 20, 2015 - Issue 2 Pages 135-156

<http://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/23750472.2015.1010278>

バンクーバーオリンピックはカナダのスポーツ参加率を向上させていない（2014年）

オーストラリアの Cora Craig 氏、カナダの Adrian Bauman 氏による新しい研究では、2010年バンクーバー冬季オリンピックにおいては、エリートスポーツによる一般のスポーツ参加促進への影響を否定。 オリンピック前の高い活動水準をさらに高めることは容易ではなく、「トリクルダウン効果」ではなく「天井効果」を示唆した。 しかしながら、実質的な活動水準が比較的低いレベルのカナダの地域では、子供のスポーツ参加への効果を見ることができる。 オリンピックのような大規模スポーツイベントは、大衆のスポーツ参加に関しても、また、集団での身体活動に関しても明らかな影響を及ぼしていないと結論付けている。

（参照） Vancouver Olympics did not increase sports participation in Canada
<http://www.playthegame.org/news/news-articles/2014/vancouver-olympics-did-not-increase-sports-participation/>

メガイベントはスポーツ参加へのトリクルダウン効果をもたらさない(2013年)

Play the Game 2013 での講演者 2 名によると、トリクルダウン効果は非常に疑問視されるとのこと。

・ Koen Breedveld 氏 (オランダ・Mulier Institute) : ロンドン市内の 80 パーセントのクラブが、ロンドン 2012 がスポーツ参加の増加の機会となっていない、26 競技中 21 競技はオリンピック競技大会後にメンバーシップは増加していないと報告。多くの人々のスポーツ参加は幼少時からの習慣に基づくものであり、多くの社会要因や時間的制約に影響されるため、メガイベントは大衆のスポーツ参加へのトリクルダウン効果を生み出せない。また、競技団体やクラブ、地方自治体が、人々が特定のスポーツを実施できる適切なインフラを整備しているか否かにも依存する。

・ Trygve Buch Laub (デンマーク・Danish Institute for Sports Studies) : デンマークのスポーツ実施率は既に高い水準にあり (成人の週 1 回のスポーツ実施者の割合は 64 パーセント)、エリートスポーツイベントがこの高いスポーツ参加率を刺激するか否かを検討。エリートスポーツイベントは、ある特定のグループ (特に 10 代の女子、7 歳から 29 歳の男子・男性) にはある程度の効果が見られた。ハンドボールや卓球、サッカー等のメディアで多く放映される人気スポーツで特に当てはまる。しかしながら、この効果は疑問視され、短期的であり、単にメディアによる放映の影響であるとも考えられる。

(参照) Mega-events do not have a trickle-down effect on sports participation
<http://www.playthegame.org/news/news-articles/2013/mega-events-do-not-have-a-trickle-down-effect-on-sports-participation/>

ロンドン 2012 オリンピック・パラリンピック競技大会からの身体活動レガシーの構築 (2012 年)

これまでのオリンピック競技大会が成人の身体活動水準を引き上げるというエビデンスは示されていない。5 つの研究データベースを用いて、ロンドン 2012 オリンピック・パラリンピック競技大会が身体活動水準を引き上げるか否かに関するシステマティックレビューを実施。その結果、①ロンドン 2012 の開催に前向きに関与していないコミュニティでは如何なる分野のレガシー構築のために大会を活用するどのイニシアチブも効果的ではない、②適切に宣伝できればロンドン 2012 は身体活動を促す機会となる可能性 (フェスティバル効果) を生

み出せるかもしれない、ということが示された。活動水準の低い成人に身体活動レガシーを残す鍵は、ロンドン 2012 のスポーツの要素をあまり強調せず、フェスティバルの要素を用いることである。

(参照) Developing a physical activity legacy from the London 2012 Olympic and Paralympic Games: a policy-led systematic review

Weed M, Coren E, Fiore J, Wellard I, Mansfield L, Chatziefstathiou D, Dowse S.

Perspect Public Health. 2012 Mar;132(2):75-80.

<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/22616427>

2012 年オリンピックの持続可能なレガシー (2007 年)

2012 年ロンドンオリンピック・パラリンピック大会には、持続可能なスポーツ・社会・文化・経済・環境レガシーを残すことができる可能性がある。このうち、持続可能なスポーツ・社会・文化に焦点をあて、スポーツレガシーについてはエリートスポーツだけでなくグラスルーツスポーツに重点を置き、2012 年に向けて英国全体でスポーツ・身体活動に対する意識を変えていくことが長期的なレガシーにつながると論じる。トリクルダウン効果として、オリパラ開催による便益が長期的に地域のニーズに応えられるよう、地域の政策・プログラムに大会を埋め込むことが重要と述べている。

(参照) Sustainable legacies for the 2012 Olympic Games

Richard Shipway, The Journal of the Royal Society for the Promotion of Health, 2007; 127; 119

<http://rsh.sagepub.com/cgi/content/abstract/127/3/119>

【どちらともいえない（エビデンス不足）、否定的見解】

限定的か永続的なレガシー：大規模ではないスポーツイベントによる参加促進効果（2014年）

大規模スポーツイベント開催による草の根レベルの参加促進効果のエビデンスが少ないため、大規模ではないスポーツイベントを対象にスポーツ参加促進効果を検証した研究。イベント開催後、スポーツ参加行動は異なるものの参加向上というポジティブな効果が見られた。しかし、単一のイベントだけで効果や属性の相関関係を見るのは問題がある。スポーツイベント以外にも、観客の時間の過ごし方等ほかの要因も考えられる。

エリートスポーツイベントを見た人がインスパイアされて身体活動やスポーツをするという「デモンストレーション効果」や「トリクルダウン効果」のエビデンスは限定的である。スポーツ参加率が向上したというエビデンスが1980年代前半から1994年まで1992年バルセロナ大会に関して提起されたが、そのほかのメガスポーツイベントでは参加率が減少した（2002年マンチェスター・コモンウェルスゲームズの例）。これまでに実施されたシステマティックレビューのエビデンスは効果の有無がミックスしており、身体活動や健康に関するトリクルダウン効果を決定づけることはできない

（参照） Limited or lasting legacy? The effect of non-mega sport event attendance on participation

Girish Ramchandani, Larissa Elaine Davies, Richard Coleman, Simon Shibli and Jerry Bingham

European Sport Management Quarterly, 2015, vol.15, No.93-110.

<http://dx.doi.org/10.1080/16184742.2014.996583>

【肯定的見解】

トリクルダウン効果：メジャースポーツイベントの開催はどのグループに効果をもたらすか（2014年）

メジャースポーツイベントのトリクルダウン効果は、開催地の人々に対して検討されている例が多い。本研究は、2006年メルボルンコモンウェルスゲームズ等のメジャースポーツイベントの開催によりどのグループが利益を得ているかを分析。トリクルダウンの枠組みは、2005年から2006年までのオーストラリア国民全般（12,993名）を対象に検討された。相関分析の結果、若者、低学歴の人々、先住民やトレス海峡諸島出身の人々は、メルボルンコモンウェルスゲームズ開催の結果、スポーツ参加に多くの時間を投じる傾向が見られた。公式教育を受けていない若者等は新しい活動に参加し、高齢者や女性、地域の人々もポジティブな姿勢を示した。

（参照）The Trickle-Down Effect: what population groups benefit from hosting major sport events?

Wicker, P., & Sotiriadou, P.

International Journal of Event Management Research, 2014. 8(2), 25–41.

<http://www.ijemr.org/wp-content/uploads/2014/10/Wicker-Sotiriadou.pdf>

3つのメジャースポーツイベントの効果（2012年）

本研究は、一回限りのスポーツイベントに参加することがスポーツやレクリエーションレベルの身体活動への参加を増やすよう、観戦者を刺激するか否かを検討することを目的とした。2010年に英国で開催された三つのメジャースポーツイベントの16歳以上の観戦者から初期データが収集され、合計2,312名の回答に基づいて分析が行われた。回答者の3分の2が、イベントでの経験が自身のスポーツ・身体活動への参加の増加を刺激したと回答した。このインスピレーション効果は年齢や回答者のスポーツの好みによって様々である。インスピレーション効果の主要因は、アスリートや競技大会に直接関連するものであった。スポーツ実施の機会に関する情報提供が、スポーツ観戦の刺激をスポーツ参加への転換へと引き起こす重要な要素になるとした。大衆のスポーツ参加に対するメジャースポーツイベントの影響に関するエビデンスは十分ではなく、結論づけられていない。如何なる「トリクルダウン」効果を引き起こすため、観戦者はまず、自身のイベントでの体験が刺激となると考えられる。

(参照) The inspirational effects of three major sport events

International Journal of Event and Festival Management 3(3) October 2012

https://www.researchgate.net/publication/263155873_The_inspirational_effects_of_three_major_sport_events

メジャースポーツイベントとスポーツ参加レガシー：2003年ラグビーワールドカップの事例（2011年）

世界的に、過去30年はメジャースポーツイベントの開催に関して大きく成長を遂げてきた。メジャースポーツイベントは、様々な理由から、組織委員会が開催し、政府が支援してきた。政府がスポーツイベントへの投資について説明する際にしばしば用いられる理由は、国民がスポーツ参加を通じて身体的にアクティブになることを推奨するものである。本研究では、メジャースポーツイベントを開催することが開催国のスポーツ参加に影響を及ぼすか否かを、オーストラリアで開催された2003年ラグビーワールドカップを例に検討した。大会開催後、ラグビーの登録者数は増加した。しかしながら、シニアカテゴリーよりもジュニアカテゴリーで多いに増加した。

(参照) Major sport events and participation legacy: The case of the 2003 Rugby World Cup

Stephen Frawley & Adam Cush

Managing Leisure Volume 16, 2011 - Issue 1 Pages 65-76

https://www.researchgate.net/publication/263564522_Major_sport_events_and_participation_legacy_The_case_of_the_2003_Rugby_World_Cup